

あとがき

このたびの辰野登恵子展は当画廊初めての展覧会であるとともに、作家にとっては東京における8年振りの個展となった。

私が思うに彼女の作品の持つ魅力とは、まずその豊かな色彩と堅牢なマティエールにある。入念に作り上げられた強靭な画面の中で、吟味を尽くされた色が響き合う。しかし、それらの色やマティエールを支えて生き生きとさせているのは、一見平凡でありながら、実はすぐれたいくつかのモチーフである。それは単なるきっかけ以上に大きな役割を果たしている。絵に向けられた視線は、モチーフをめぐって現われてこようとするものを見定めようとしたり、消えていこうとするものを追って引き込まれていったりする。特に、以前から使われているモチーフで、小さい長方形がいくつもつながってひし形の輪を形作っている代表的なモチーフがある。同じモチーフでありながら、この輪と、それによって隔てられる内側と外側が一点一点異なる。鎖の輪の内側は周囲から守られた聖域のように見えることもあれば、ときにはまた底知れぬ深淵のようでもある。あるいは鎖の輪そのものが溶け崩れていくこともある。絵画には本来備わっているはずのダイナミックな構造というものがいると思う。辰野作品はその構造の様々な相貌を、たったひとつのモチーフを使って顯わにしてみせる。

今回もこのモチーフの作品が、たて3m程の最も大きい油彩(Work 88-P-13)をはじめとして数点出品されている。これらを見較べ楽しみながら絵画の醍醐味を満喫していただければと思う。

今展覧会には、このほかにもいくつかの魅力的なモチーフが新たに加わった。とりわけWork 88-P-2と88-P-7はこれまでになかったタイプだ。一昨年秋のロンドン、イエテボリ(スウェーデン)での個展が評判を呼んだことはまだ記憶に新しい。それに続いて辰野さんの充実ぶりがかくも遺憾なく發揮されたことを思うと、これから展開がますます楽しみである。

最後になったが、テキストを書いて下さった篠田達美さんに御礼申し上げたい。丁寧な取材に基づく作品分析には説得力がある。たいへん厚みのあるテキストを頂いたことに感謝している。

1989年2月
佐谷画廊
佐谷周吾